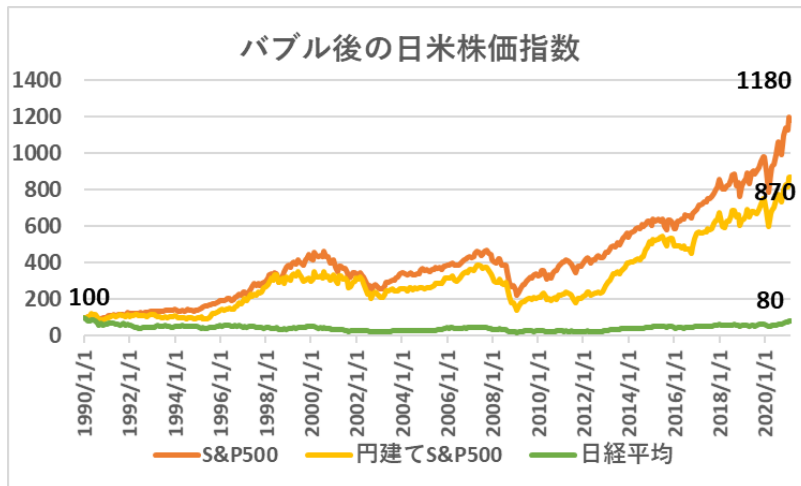


ATTENTION

「日経平均が30年半ぶりの高値」を米国株と比較すると



このグラフを見て改めて日米株価の開きを実感します。実は指数ベースでは、日本のバブル崩壊以来14.8倍、為替を考慮しても10.9倍の開きという状況です。日経平均が30年半ぶりに3万円台乗せと、徐々に明るい気分になりますが、よく考えれば「やっと30年半前の水準に戻った」ということです。これは歴史的に見ても大変なことです。ニューヨークダウが1929年の大恐慌から25年たってやっと元の水準に戻ったのに比べても、31年たって89年末の最高値に届かないのです。一方で米国株の強さを改めて感じます。コロナ禍で急落した昨年2、3月からの急速な戻り、そして長期で見てもこのようなパフォーマンス。Never bet against America。「米国はだめと賭けるな」というバフェットの言葉が重く響きます。我々の視点から言い換えれば、お金の運用では「決して、日本だけに賭けるな」ということです。いまや、米国株や世界の株に投資しようと思えば、低コストで簡単にできます。長期で見てもこの有様ですから、「今まではそうだったが、これからは分からない」といって外に目を向けないのは無作為の判断として、これまでの30年がそうだったように、あとあと悔いの残る判断だったということになりかねません。

COLUMN

コロナ禍で、読書の勧め

いまだに関東一都三県で緊急事態宣言が続く中、私たちは気持ちを前向きにするため、運動が必要ですが、脳の健康を保つことも大事です。そのためにいいのが読書。この効用を、脳神経学者や心理学者が言います。「読書は脳にいい。その効用は、いまのような時期に特にいい。読書は世界を広げてくれ、現実から逃れ、目新しさ、驚き、興奮を与えてくれる。(興奮の伝達に重要な役割を果たす)ドーパミンを増加させるのだ。読書は我々の視点を広げる。そして日々の生活を改善する。」

読書は“瞑想”の一種ともいわれています。読書をしているとき、世間の騒音から逃れ、まさに自分の世界に没入できるのです。

読書を習慣にすることは、私も大変大きな効用を感じています。小説、哲学、科学などさまざまなジャンルで、私が知らない歴史、知識や考え方、心構えを身につけられます。得られる情報量から比べれば、コストパフォーマンスは抜群です。読んだ後の充足感もいいものです。そして、次の本に入っていく。次にどの本を読もうかと選ぶのは、気分がいいものです。私の場合、読んでいる間に「ここはよい」というところをチェックして、読後に、書き残します。これが、いまでは大変有効なメモとして残っています。困ったことに、読書している間にあまりに気持ちが安らぐので、知らないうちにうたたねというのが、私の場合玉に傷ですが、それはそれで体にいいだろうと勝手に解釈しています。最初は、負担が少なく、興味があるものから入るといいでしょう。そして本を読むことが習慣になれば、しめたものです。

MARKET

	(2月末)	(1月末比)
日経平均	28,966.01円	+1,302.62円 (+4.71%)
NYダウ	30,932.37ドル	+949.75ドル (+3.17%)
米ドル	106.60円	+1.85円 (+1.77%)

私の書棚より

9回裏逆転満塁本塁打を可能にしたのは、汲めども尽きぬ松永のエネルギーである。絶対に負けることはない信じ続けた超樂觀主義と、たたかれればたたかれるほど燃え上がる闘争心だ。それを支えたのが、恩師・福沢諭吉の説いた自立の精神だった。

-電力王・松永安左衛門の生涯(水木楊 著)

日本の戦後経済を読み解き、未来の処方箋を書く(2)

1989年大納会の日、日経平均は最高値の38,957円44銭を付けたが、そのあと、いよいよバブル崩壊となる。それから30年余り、これだけの長さで日本経済が凋落を続けるとはだれも予想しなかつたろう。今では「日本を
見てみる」で引き合いに出されるのは「デフレが長く続く国」「株価が30年たっても回復しない国」「まったく変わらない国」「世界一の借金大国」などと、悪い国の好例として取り上げられるばかりだ。

バブルの絶頂期は、普通の企業まで借金して財テクに走り、証券会社は「特金」口座を作らせ、「握り」と称して、損失が出た場合補填することを約束していた。当時「財テクしない会社は馬鹿だ」といわれた。それほど上がるという空気が蔓延していたのだ。そのこと自体がどこか狂っていた感じが強い。そして株価がいったん下落に転じると、その抱え込んだ損失を次から次に移し替えた結末が、1997年山一証券の崩壊である。この時は、このニュースを伝える一面見出しを見て、私もひっくり返った。当時の社長が「社員は悪くありません、我々が悪いんです。」と涙ながらに言っていたのは衝撃的だった。この頃、金融機関と大蔵省との癒着が「ノーパンしゃぶしゃぶ」と口もはばかれる接待汚職という形で表ざたになる。ここまでお上とべったりだったかと私も驚いたものである。

さて、時間を戻そう。1990年バブル崩壊の始まりとともに、地価が急落。地上げ屋にまで貸し込んでいた信用組合の経営危機が表面化。公的資金の投入の必要性が盛んに議論される中、国は政治責任に及ぶのを恐れ、それ

を先延ばし。その時ゴールドマン・サックスの金融アナリスト、デービッド・アトキンソンが「実際には不良債権は20兆円ある」とのレポートを発表したから、大騒ぎとなった。アトキンソンは現在、菅総理の有力ブレーンになっている。

金融危機の構造は、金融機関が財テクや不動産投機に湯水のように資金提供し、バブルをもたらししたが、その反動は大きく、大波の打ち返しに持ちこたえられなかったということだ。しかし、この間、政府・金融機関は責任逃れと保身に身をやつし、抜本的解決策を先延ばし、小出しの対応に終始した。このことが傷口を大きくした感が強い。そして、その状態がずるずると続き、慢性化して、日本の国力、活力を大きく弱めたのである。まとめて言えば、痛みを伴う大胆な改革ができず、重大な慢性病となったのだ。

これは企業にも言える。ジャパニーズナンバーワンともてはやされ、日本企業の製品が世界を席巻する状況に天狗になったのだろう。「これまでのやり方でよい」となり、あらゆる面で変化に対する反応が鈍くなり、「井の中のゆで蛙」になったのである。世界が大きく変貌する中で、日本は官民ともに、世界での存在感が低下し、現在に至っている。一方で構造改革、規制緩和は一向に進まず、旧態依然の様相がますます強まっている。いわば、根がだんだんと腐ってきている状態ではないか。根が腐れば、いずれ木は倒れる。それが、具体的には国産ジェット機は飛ばず、コロナワクチンは外国頼み、国の政策も世界から出遅れという状況に現れている。では、これから日本はどうしたら挽回ができるか。来月この欄で、大胆にそこを掘り下げよう。

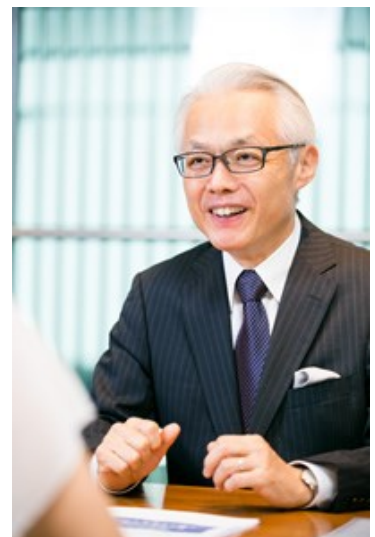
まかせて安心、資産運用のホームドクター

- 大切なお金を間違いない方法で運用しているのか、心配になることはありませんか。
- 退職後のセカンドライフを、お金の心配なく、ゆとりを持ってお過ごしですか。
- 仕事が忙しくて、なかなか運用まで手が回らないということはありませんか。
- 銀行や証券会社が勧めるままに、株や投資信託を購入していませんか。

金融商品の中身や手数料がどうなっているか、きちんと把握していますか。

びとうファイナンシャルサービスは、金融機関から完全独立のFP・資産運用アドバイザーです。その強みを生かし、お客様に、客観的で、公正・中立なアドバイスを提供しています。手数料が高く売りやすい商品をお客様に売っていただくのではなく、お客様にもっとも適した金融商品やお客様にベストのアドバイスを提供しています。

びとうファイナンシャルサービスは、お客様の目標や夢の実現のため、40年を超える長い経験と深い専門知識、高い倫理観をもとに、お客様の利益のみに目を向けたサービスを提供しています。たとえるなら、多くのお客様の人生という航海で、無事に目的地に到着する大型客船であり、いつもお客様の資産運用という面で健康管理をするホームドクターです。



びとうファイナンシャルサービス
代表 尾藤 峰男

びとうファイナンシャルサービス 公式HP

<http://www.bfsc.jp>

あなたの資産運用を成功に導くメルマガ！

お申し込みは <http://www.bfsc.jp/mailmagazine/>

発行者：びとうファイナンシャルサービス
代表取締役 尾藤峰男

電話：03-6721-8386
携帯：070-5567-3311 電子メール：info@bfsc.jp